

異動を機に目指した施工管理技士



取得した資格：1級土木施工管理技士
資格取得年度：令和6年度

たちかわ はやた
立川 隼太*

受験の動機・経緯

私は市役所に入庁して8年目になります。入庁から7年目までは水道工務課に所属し、主に緊急漏水の対応や窓口業務等を担当しました。施工や現場監督などの「工事」に直接関わる機会はあまりありませんでした。

8年目に入り、道路課へ異動となったことで、初めて本格的に道路改良や舗装工事などの工事現場に関わることになり、現場立ち会いや工事監督などの業務が、日常業務の一部となりました。

そうした中、課内で「発注者としても施工に関する知識や技術力を高める必要がある」という共通認識が生まれ、1級土木施工管理技士の資格取得に取り組む流れになりました。私自身も、現場で施工業者と対等に会話し、技術的判断ができる職員でありたいという思いが強まり、受験を決意しました。

第一次試験の傾向と対策

第一次試験はマークシート式で、出題範囲が非常に広く、施工管理全般から法規、品質、安全、環境に関する内容まで幅広く問われます。特に私のように、これまで施工管理の実務経験が少ない発注者の立場では、現場の施工方法、材料の性質や安全対策の具体的な手法など、施工者の視点で必要となる知識に苦戦しました。

対策としては、まず過去問を徹底的に解き、出題傾向を把握することから始めました。問題集は何度

も繰り返し取り組み、正解を覚えるのではなく、「なぜその選択肢が正しいのか」を理解することを心がけました。また、文章や図だけではイメージしづらい施工手順については、YouTubeなどの動画教材を活用し、視覚的に学ぶようにしました。

道路課で担当した舗装や排水工事の現場を思い浮かべながら学習することで、知識と実務が結びつき、理解が一段と深まりました。業務とのつながりを意識しながら勉強することで、モチベーションも維持しやすくなりました。試験本番では、過去問で繰り返し出題されていた分野が多く出たこともあり、落ち着いて対応することができました。

第二次試験の傾向と対策

第二次試験では記述式の論文が中心となり、自身の実務経験をもとに施工の課題とその対応策について問われます。施工を「自分でやっていない」という発注者としての立場に少し不安がありましたが、実際には「施工の管理・監督を行った経験」でも十分に対応可能でした。

まずは、自分が関わった工事について整理するところから始めました。どのような工種で、どのような課題があり、どのような技術的判断や対応を行ったのかを時系列で書き出し、素材を蓄積していきました。その上で、どの課題でも共通して使える論述の「型」を身につけることに注力しました。私は、「工事の背景・目的」、「問題の発生」、「原因の分析

*富士宮市 都市整備部 道路課 主査

と技術的対応」、「結果・反省点・今後の留意事項」という流れをベースに、複数の工事に応用できる構成をつくりました。

また、模範論文を読み込んで、文体や言い回しを学び、自分の論文にも自然に取り入れるよう心がけました。客観的な評価を受けながら改善を重ねたことが、合格につながった要因の一つです。

論文試験では、「自分がどれだけ主体的に現場に関わり、技術的な判断を行ったか」をしっかりと伝えることが大切です。発注者として現場に立ち会い、業者と協議し、工程、安全や品質などに対して具体的に対応した経験は、施工経験に劣らない「技術力の証明」になります。

受験生へのアドバイス

発注者だからといって、1級土木施工管理技士の取得をためらう必要は全くありません。むしろ、発注者の視点で現場を管理・調整してきた経験は、受験において十分に評価されるものです。

私自身、異動を機に工事業務に本格的に携わるようになったタイミングでの受験でしたが、逆に言えば「現場の経験を積み始めたばかりの時期」だからこそ、学ぶことの意味や必要性を強く感じ、集中して取り組むことができました。経験年数が少なくても、関わった現場の中で自分がどのように考え、判断し、行動したかを具体的に説明できれば、それが合格への大きな武器になります。

また、第一次試験・第二次試験ともに、継続的な努力が合格のカギを握ると感じました。業務と並行しながらの勉強は決して楽ではありませんが、毎日少しずつ取り組むだけでも着実に力がつきます。合格までの道のりは長いようで、終わってみればあっという間です。迷っている方も、まずはチャレンジしてみてください。

おわりに

1級土木施工管理技士の取得は、私にとって単なる資格の取得にとどまらず、「発注者としての技術力と自信」を高める大きな転機となりました。これ

まで施工に対して漠然としていた理解が、今回の勉強を通じて体系的に整理され、現場での会話や判断にも自信を持って臨めるようになったと実感しています。

また、施工業者とのやり取りの中で、互いに理解を深めながら、より良い工事を目指すためには、発注者側にも確かな知識と裏付けが必要だということに改めて感じました。そのような意味でも、この資格は今後の業務に直結する「実力」として活かせるものだと確信しています。

来年度以降は、次のステップとして技術士の取得も視野に入れています。今回の受験勉強を通じて、知識の積み重ねや論述の訓練が、技術士試験にもつながると感じており、引き続き自己研鑽を続けていきたいと思っています。

技術者としての成長に終わりはなく、学び続ける姿勢こそが、公務員であっても現場で信頼される存在になるためのカギだと思います。これからも発注者として、地域のインフラ整備に責任を持って取り組むとともに、自らの技術を高める努力を忘れずに歩んでいきたいと思っています。



【著者紹介】立川 隼太（たちかわ はやた）

平成29年富士宮市役所入庁。7年目まで水道工務課に所属。8年目より現職にて、道路工事の設計・監督業務を担当。